



橘色ボニテ彼女との
えっちな生活



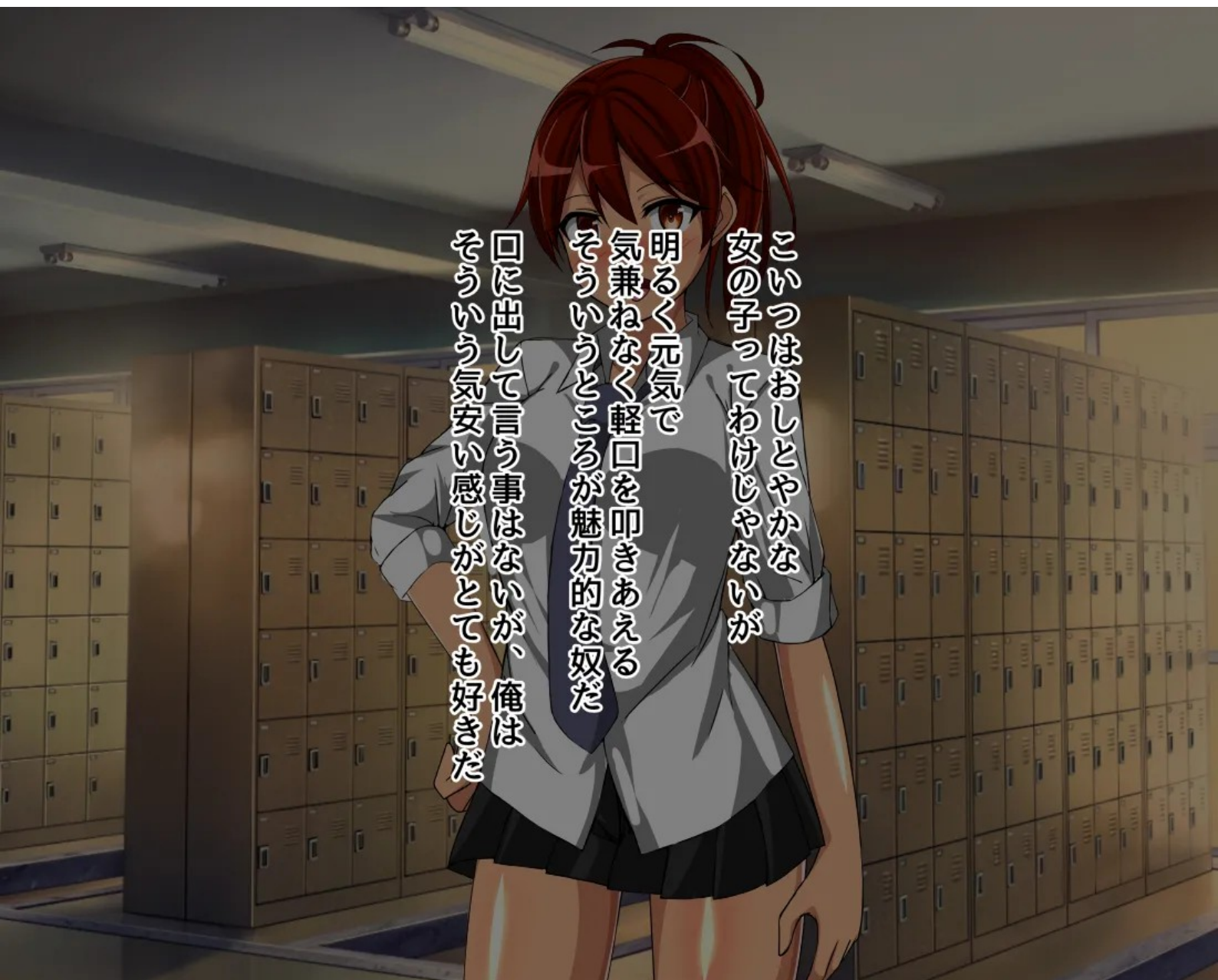
今日も退屈な学園生活が終わった。
俺は後は帰宅するだけだ。俺は昇降口で
いつも一緒に帰っているアイツを待っていた。



「おーっす、今日も
学校お疲れ様！一緒に帰ろ！」
「ああ、お疲れ」



こいつは俺の彼女
付き合い始めて一年になる
付き合うまで色々あったのだが
今はカップルってやつをやっている
まあ……その事は
いつか語る事もあるだろう



こいつはおしとやかな
女の子ってわけじゃないが

明るく元気で

気兼ねなく軽口を叩きあえる

そういうところが魅力的な奴だ

口に出して言う事はないが、俺は

そういう気安い感じがとても好きだ

「なーに冴えない顔してんの
もつと笑顔でいないと
幸せが逃げるよ?」

「うっせ。早く帰ろうぜ」



今日クラスであつた事
他愛ない事を離しながら帰路につく
学友がまたバカやっただとか
そんな他愛ない事を離しながら
彼女と一緒にこうやつた時間を
過ごすのも悪くない。



「あはっ、何それ！
相変わらずアイツ馬鹿だなあ」



「ところでさ、今日……暇？
暇だったらさ、あんたの家
行ってもいい？」

「え、なんで？」



「なんでって……
言わなくてもわかるでしょ？」
女の子のあたしに
そんな事言わせる気？」

「まあ大歓迎なんだけども
都合よく女の子とか言っちゃって」

「私はいつでも女の子だっつもの！
とにかく今日はアンタん家行くから」



「わかった。
じゃあ、このまま来いよ
どうせ親もいないし」

「アンタのご両親
今日もいないんでしょ？
実質一人暮らしみたいなものだよね
漫画とか小説の主人公みたい！」





……まあ、そういう事だ。
付き合って一年ともなれば
もうそれなりに経験はしているわけで
俺達はまだまだ性欲旺盛な若者
もうとにかく盛りまくっているのだ



いつもは元気な奴だが
こういう時は少しおらしくなる
そういうところも可愛い



「いや、可愛いなと思って」

「なに、なんか顔についでる？」

「…………えへへ♥」

!!キ

!!キ





「れる、ん……んちゅ、
はあ、はあ………♡」

「ちゅ、ちゅ………」

んる



「うん。でも……..
キスだけでいいのか？」

はー！……♡

「はあ、はあ……っ
キス、きもちいい……♡」

はー！……♡

「んー、もっと、気持ちいい事
しよう……？」



「あー……………
良い揉み心地だ。至福だ」

「んっ、そう？」

あまり、大きくないから
あ…………っ♡」





ちゅっ
ちゅっ
ちゅっ

ちゅっ
ちゅっ
ちゅっ

ちゅっ
ちゅっ

あん♡

ひゃあ♡

ん♡

ゼッ

ゼッ

「ひゃうう……っ♡吸っちゃ
やだあ……♡何も出ないってば…」
「あああつ、そんなっ♡
ちゅーちゅーって……っ♡」



「うん、やっぱりでないよね」

「はぁ、はぁ……っ……♡
もう、バカ……♡」

「……もう、いいい？」

「うん……」



「あーすっげえきもちいい
相変わらずぎちぎちに締まる……」

「ちが、あんたのが
おっきいんだよ♡
んっ♡あ、あんっ♡」

んっ♡



「んっ♡んっ♡あぁっ
きもち、いいよお.....♡」

「はぁっはぁっ」

「もっと、突いてっ♡」

んっ♡

んっ♡



「あー、出そうっ、もう
出してもいいかっ」

「うんっ♥いいよ、だして♥
膣内につ♥いっぱい出してっ♥」

フェロ

フェロ

フェロ

フェロ

あゝ

あゝ







はー！

ギョ

ギョ

はー！

「ちゅー」

「まだ、元気だ………
相変わらず、絶倫よね♡」









はー！♡

ドロッ

はー！♡

「何言っただか、ふふ……」

「育ち盛りだからな……」

「……ふふ、いっぱい出た……♡
すごいね……こんなに何度も」



「お、おう……つか
元気だなお前……」

「あーきもちよかった！じゃ
お風呂入ってご飯食べよう！」

やっつてゐる時は俺が優位の事が多いのだが
いざ終わってみると俺の方が
くたくたになつてゐる方が多い
……まあ、別にいいんだけど

結局この日は一緒に風呂に入り飯を食つて
ひとしきりイチヤイチヤした後
同じベッドで眠つた。正直、最高です



そして、数日後のとある日

「今日はちよつと着てほしい
服があるんだけど」

「え？なに？どういう事？
コスプレしてエッチするの？」

「まあそういう感じだな
じゃあこれ」

「まあ、いいけど……」





「お、
おお……！」

「これでいい……？
恥ずかしいんだけど……！」



「ちよっ……っー」

「可憐すぎる……っー」



「や、いきなりはダメだって
こら、おちつけ……っ♡」
「むり！」

「あんっ、そこいじったら
……っダメだっつてっ
ん、んんうつつっ♡」





「あ、ダメ、ダメっ……
きちやう……っ♡
もう、ばかあっ♡」

あーっ♡

ダメっ♡

あーっ♡

くちゅ

くちゅ

くちゅ





「はあ、はあ……っはあ……っ
ばか、このお……っ♡♡」
「……………あ、すまん」

「全く、暴走しすぎだったの
こうしてやる、反省しろっ」

「いででで！ごめんなさい！
反省します反省します！」

「よろしい」

ギョッ





「……うう」

「ぺろ……ぺろ……ぺろ……」



「どう？れろ...、ちゅぽ♡」
「きもちいいす.....」

「はむ……んん……
おっひい……ちゅぷ♡」

「あぁっ……口の中
あつたけー……」

「んふふ、びくびくしてる…♡」

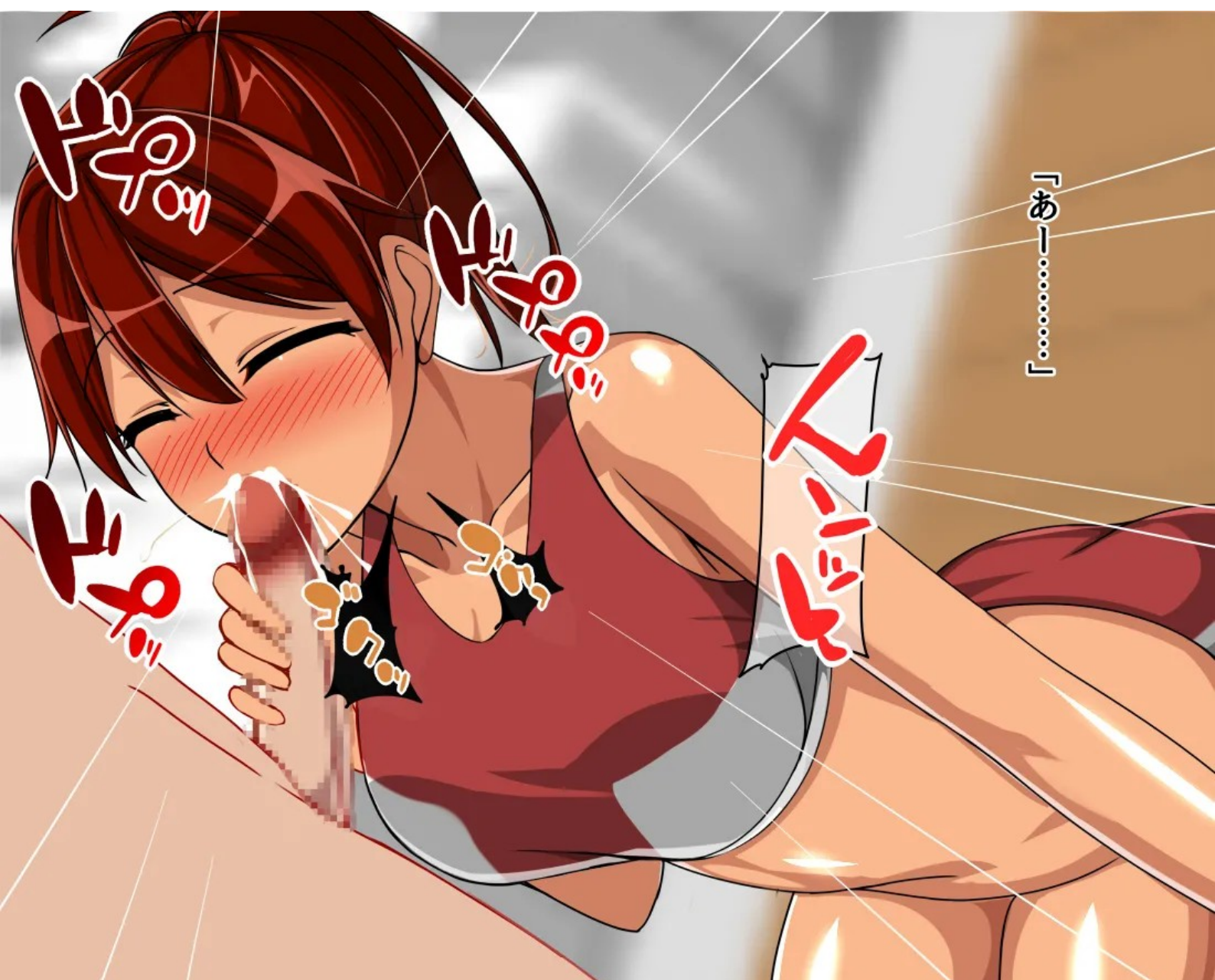


「きもち……あーだめだ
そろそろ出ちゃうわ」

「ん、ひよーがないなあ……
□の中に出していいーよ……」

「う、もう……出す……っ」







「う…っっ…めっちゃ出た」
「出しすぎ……♡」



「ん、ふうふうふうつ
はいつて、きたあ……つ♡」

ん
——
びん



「ん、ん……んっ♡んっ♡
あ、ああ……っ♡きもち、いいっ♡」

「そっちからも、腰動かしてくれよ」

「そうしたいけど
力入らないっ♡」

ヌグッ

ヌグッ

ヌグッ

ヌグッ

「はあ、はあっ、そんなにっ、
感じてもらえるとはっ
光荣っすね……っ」

「うんっアタシの、おマンコの中♡
ごりゅごりゅってこすって♡
すっごく気持ちいいっ♡」

「はあ、はあ……っ
やっぱお前の中
さいっごう……っ」

「アタシも、いいよっ♡
いいよっ……♡
もっと、突いてっ♡」

ずっ
ちゅ

ずっ
ちゅ

ぬっ
ちゅ

「もう、いつく……っ
いいか……？」

「うんっ、うんっ♡
いいよ、出して♡
膣内につっぱいだしてえ♡」

はん

はん

はん

はん









「はあ……♡はあ♡
まだ、するの……？」
「だめか？あと一回だけ」



カアアアアア

ザッ

ザッ

「ま、まだビキビキ……
もう、あと一回だけだからね……
あと、ゆつくり……
アタシ、もう体力が……♡」

「わかった」

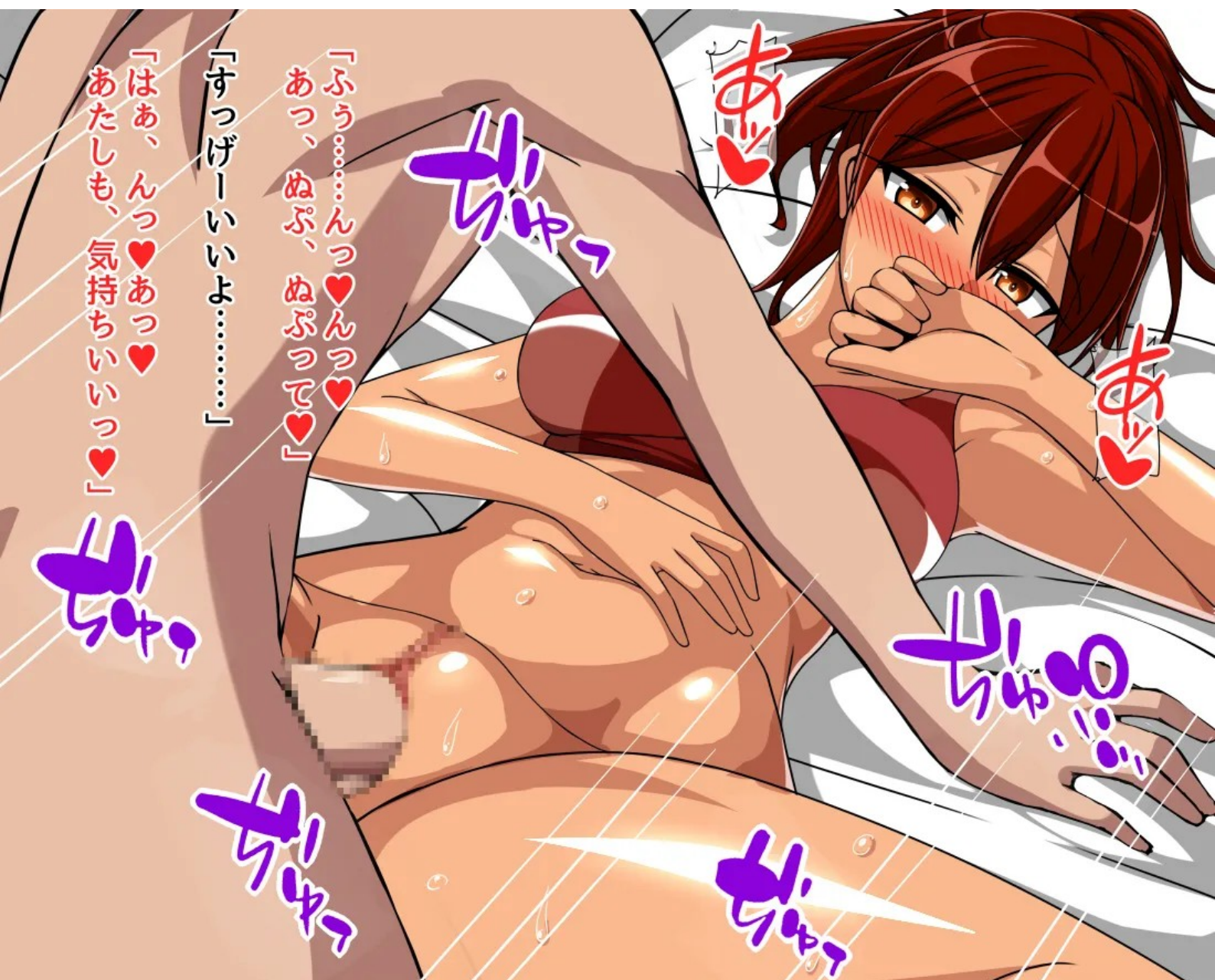
「あああ……んっ♡
また、入ってきたあ♡」

「ああ……マンコの中
きゅんきゅん締め付けてきて
チンコ入れられて
喜んでるのがわかるな」

「そ、そういう事言うのやめてよ
恥ずかしい、よお……っ
あ、んっ♡、んっ♡んっ♡」

ぬいっ、っ





あッ♡

あッ♡

「ふう……んっ♡んっ♡
あっ、ぬぷ、ぬぷって♡」

「すっげーいいよ……」

「はあ、んっ♡あっ♡
あたしも、気持ちいいっ♡」

ちゅっ

ちゅっ

ちゅっ

ちゅっ

ちゅっ



「もうイキそうか？」

「はあ、はあ……..
きもちいい……..
♡♡」

んん

んん
♡♡♡

ズ
マ
ッ

ズ
マ
ッ

ズ
マ
ッ

ズ
マ
ッ



あゝ

あゝ

あゝ

はぁ

はん

はん

「うん、んんっ……♡
もういつちやう……♡」

「俺も、もういくから……」

「うんっ、一緒に……♡
あ、あ……♡あっ♡
いく……っ♡」

はん





「はあ……はあ、はあ
はあ……はあ……
きもちよかったあ……」

「はあ……はあ……っ」

「はあ……気持ちよかったけど
疲れちゃった……
眠い……♡」

「俺も……」



俺が暴走してやりすぎてしまったせいで
何か特定の服を着てのエツチは
あまりさせてくれないようになってしまった
まあ、人の頼みを断れない彼女は
頼み込めば、しょうがないなあ
うなずいてくれるのだが。

「今日は普通にするよね……？
コスプレはしないよ……？」

「わかってるって、普通にしよう」





「そのまま、脚広げててくれな」

「くう……やっぱ
超恥ずかしい……」

「いいからいいから。
これからもつと
恥ずかしいことするんだから」

かきおろす……



「あっ………♡
い、息が……っ♡」
「舐めるから」
「う、うん……っ」



あ

ん

「ひやうう……っ、舌がっ
舐められちゃってるよ……っ」

「美味しい」

「んなわけないでしょっ」









「ふふん♥」

「この体制好きだよな
俺も好きだけど」

「初めての時もこの格好だったし
あの時の事、思い出すからかな？
じゃあ、いれるから…♥」







「ふふっ……可愛い♥」

「はい……」

「きもちいい？」

「あ、ああ……」

「はいつたよ……あんたのおつきいちんちんがアタシの根元まで……♥」

はっ

はっ

はっ

はっ

はっ

きん

きん



「んっ、んっ……んっ♥
中でぴくぴくしてる…でも
すぐに射精しちゃだめだから」

「我慢はしてるんだけど、俺
この体制弱いんだよなあ…
うおっ…あー……」

「いーっぱい感じさせてやるんだから
なるべく長く味わってね♥」

ズッ

ズッ

ズッ

ズッ



「はあ、はあ……んっ♡
どう？アタシの膣内…っ
すぐに射精ちやいそうでしょ？」

「は、はい…っ」

「もーっつと、感じさせてあげるから♡」





「あーむり!でるっ」

「あああああああああああつ♡」

シャワー

シャワー

シャワー

シャワー

ビュ

ビュ

ビュ



「んんっ♡はあ、はあっ♡
あ、ああっ……………♡」

「気持ちいいか？」

「うんっ……………んっ♡
ああ……………♡きもちいい……………♡」



「んっ、んっ……♡
気持ちいだけじゃなくて
すっごく幸せ……」

「え……？ 幸せ……？」

「こうやって…裸になって♡
大好きな人とぴったり
密着して……幸せ……♡」



「俺も嬉しいよ……..
お前の事、好きだからな」

「ふふ……アタシも♡
アタシも大好きだよ♡
世界で一番好き……っ」



「あ、あつ…あん、あ…♡
も、もうイっちゃいそう…
深いのくる…っイク…っ♡」

「お、俺も…もう」

「ねえ、一緒に…♡」

「一緒にイこ♡一緒に」

「一番気持ちよくなる…♡」

「ああ…っ」



イクっ♡

あゝ♡

イクっ♡

「あーっ♡ イっちやう♡
イク♡ イく♡ イクっ♡」

はぁん
はぁん

はぁん

はぁん







「これから、いっぱいしようね…♥」

















































































































